



オールラウンダー

魔境育ちの全能冒険者は 異世界で好き勝手生きる!! 2

追い出したクセに戻ってこいだと?
そんなの知るか!!

α L P H α L I G H T

アノマロカリス

Anomalocaris

目次

第一章

「すく〜るらいふ？」
007

第二章

「えいゆ〜へのみち！」
177

Makyo Sodachi no All-rounder
Ha Isekai de Suki Katte Ikiru!!



主な登場人物

Main Characters

ガイアン

肉体に絶対の自信を持つ冒険者。情報収集にも長けている。

ザッシュ

リュカをチームに引き込むが、身勝手に利用して追放した通称「自分に都合の良い男」。

シドラ

ダンジョン内で発見された
タイニードラゴン。
体に似合わず
かなりの大食漢!

リュカ

本作の主人公。
全属性の魔法や卓越した
剣術などあらゆる能力を
使いこなすが、家族には
頭が上がらない……?

リッカ

リュカの双子の妹。
聖女候補の
修業をしている。
お金が大好きで
ずる賢いところも。

シンシア

お近付きになりたい
学園女子No.1!
熱狂的な信者も
いるみたい……?

クララ

見守りたい
学園女子No.1!
男女問わず
ファンがいる。



第一章
「すく～るらいふ？」

Makyo Sodachi no
All-rounder Ha
Isekai de Suki Katte Ikiru!!

第零話 学園にて

僕、リユカは学園のとある一室で、二人組の少年に鎖で拘束されていた。片方はやや太っていて、もう片方はひよろつとした体形だ。

うん、あだ名は『小太り』と『ひよろひよろ』でいいな。

「学園に来て日の浅いお前が何故、シンシア様と親しくしている！ 馴れ馴れしいんだよ!!」

そう言いながら小太りが、鉄の棒を僕の顔面に向かって振るう。

……まあ、大したダメージはないんだけど。

相手が屈強な冒険者だったならそれなりのダメージになるのだろう。しかし彼は殴り合いの喧嘩すらロクにやったことがなさそう。貴族の跡取りとかなのかな。

殴られても大して痛くない。

母さんに巨大メイスで撲殺された時の方が数百倍痛かった。

「大怪我をさせるなよ！ 死んだりしたら面倒だから……!」

ひよろひよろの言葉に、小太りは頷いてから、僕に言う。

「お前も妙な真似はしないことだな！ この部屋には魔力を使えなくする結界を張っているんだ！ 助けを求めようとしたって無駄さ!」

結界ねえ……?」

僕は思わず口元を緩める。

だってこいつらが言っている結界は下級魔道士程度にしか通用しない、効力の低いものだから。

僕は問題なく手の平に魔力を流せている。

だが、情報を引き出すためにはわざと逃げずにやられるフリをしなければならないのだ。

このままもう少し挑発し続けて、こいつらが学園で起こっているところある事件の犯人かどうか見極めてやる。

「ところでさ、シンシアちゃんって誰？ クラスの誰に対しても同じように接していたし、そもそもまだ全員の名前を把握しているわけじゃないから、誰のことが全くわからないんだ」

シンシアは同じクラスの、隣の席に座っている女生徒だ。流石に覚えている。

だが、煽るために嘘を吐いた形だ。

「シンシア様をちゃん付けだ?! あの方はこの学園一高貴な存在なんだぞ!」

小太りは、わなわなと震えながら言う。

「ほーん、これはそういうことか。」

「僕はニヤニヤしながら返す。」

「なんだ、惚^ほれているのか？ やめろよ……自分が声を掛けられないからって醜^{みにく}い嫉妬^{しつと}心で他者に暴力を振るうなんて……モテないぞ！」

「減^へらず口を……」

「小太りは再度鉄の棒で僕を殴り、ひよろひよろは腹に蹴^けりを入れてくる。」

「全く痛くもかゆくもないけどね。」

「情報を得られそうにないし、この茶番に付き合うのも面倒になってきた。」

「いい加減、この拘束を解いてくれないか？」

「僕の言葉に、小太りは愉快^{ゆかい}そうに返す。」

「お前が今後、シンシア様に馴^なれ馴^なれしく声を掛けないと誓^{ちか}えば解いてやるさ！」

「いや、だから……僕のクラスの子がシンシアちゃんなんだよ？」

「シンシアちゃんじゃない！ 様を忘れるな！ お前のクラスで学園一高貴と言えば彼女

しかないだろう！」

「小太りがそう力説した。」

「僕は首を傾^{かし}げる。」

「いや、全くわからん！ 僕のクラスに、そんな目を惹^ひく美少女なんていたっけ？」

「お前の隣に座っているじゃないか！ これでわかったら！」

「僕は頷く。」

「あーあの子がシンシアちゃんっていうのか！ ……っていうか、それほど目立つかな？」

「割と普通の子じゃない？」

「言いながら僕は、僕が生まれ育った魔境——ゴルディシア大陸のカナイ村について思い起^{おぼ}こす。」

「そこは、人口百人程度の小さな村で、近くには、かつて世界を征服しようとする大魔王サズンデスの居城がある。その大魔王討伐より百年近く経っている今もなお、大魔王の瘴^{じょう}気がその地を汚染^{おご}して村の周囲には強力な魔物がうようよいる。」

「カナイ村が他と比べて変わっているのはそれくらいかと思っていたが、ここにいる二人の基準で考えると、村の住民はみんな美形だったような気がする。」

「だから、一般的に可愛^{かわい}いと呼ばれる子を見てもなんとも思わないのかもしれないな、なんて。」

「彼らは怒り心頭^{しんとう}といった様子で、剣を抜いた。」

「ここまで来ると、穏便^{おんべん}に済ませてやれないなあ。」

「念のために聞くけど、その剣で僕をどうする気なのかな？」

「僕が尋ねると、小太りはドスの利いた声で言う。」

「お前はシンシア様と……そして我々を侮辱しすぎた！ お前に制裁を加えてやる！ お前が死んだら、死体は上手く処理してやるよ」

なるほど、どうやら本気のような。

想い人を『普通だ』って言っただけでここまでするとは、随分短気な奴らである。

これ以上、情報を聞き出すこともできなさうだし……いや、それどころか何も情報を持っていないそうだな。

ではこちらにも反撃と行こうか……人を殺そうとするってことは、自分が殺される覚悟があるってことだもんね？

「なら僕も反撃させてもらうけど、良いかな？」

僕は言う。

その言葉を、ひよろひよろが鼻で笑った。

「拘束が解けるものならな！ 言ったろ、この部屋では魔力は一切使えな……」

僕は魔力を放出して、体を拘束している鎖を消滅させた。

そして鉄の棒で殴られた顔をヒールで治してから、二人に話しかける。

「この程度の鎖なら、解こうと思えばいつでも解けたんだよね。人を殺そうとするくらいなんだから、自分が殺される覚悟もあるはずだよな？ まあ、殺しはしないけど許す気もないし……闇魔法・「奈落」！」

僕が魔法を発動すると、二人は二つの小さな黒い玉に閉じ込められた。

中にいる二人に聞こえるように、僕は説明してあげる。

「奈落は、闇の牢獄を作り出す魔法でね……こちらからの声や音はそっちに聞こえるけど、そちら側からいくら叫んでもこっちには届かないようになってるんだ。まあ、三日ぐらいしたら解放してあげるよ。それまでは、ここで反省するがいいさ」

ちなみに「奈落」内の経過時間と、現実世界での経過時間のバランスは調整でき、現実世界での一日を、「奈落」内の百年にまで設定できる。しかも球体内では現実時間分しか年を取らない。

そして、「奈落」内でどれだけ時間が経過したかは球体に記される。

ただ、今回は便器の中に落とすだけで十分過ぎる制裁な気がするので、現実時間と「奈落」内の時間の流れは同じにしてある。

僕は二つの小さな玉を拾い上げ、男子トイレに入って便器の中にそれらを放り投げた。

学園のトイレは、汲み取り式だ。

週に一度はスライムを放って溜まった便を回収するのだけど、回収日は昨日だったはず。だからそれより前に魔法が解除される設定にしておけば問題なからう。

僕が設定した解除の時間は三日後の昼間。

解除された彼らがどんな反応をするのかと考えると、思わず笑ってしまいそうになる。

失踪騒ぎにならないよう、後で学園長には伝えておかないとな。
 そう考えつつ、僕は大きく伸びをして呟く。
 「潜入してまだ二日目だけど、まだ手掛かりは掴めないか……」
 僕は、これまでの道のりを思い起こす。

第一話 リュカの旅とザッシュの旅（今回は二人の話です）

僕はカナイ村を出て、冒険者になった。

全く常識を知らず、実績もない新米冒険者である僕を仲間に入れてくれたのは、チーム【烈火の羽ばたき】。

そこで僕はサポーターとしてチームのために頑張っていたのだが……加入の二年後、リーダーであるザッシュに追放されてしまう。

他のチームより待遇も良くなかったし、それなら心機一転、一人で頑張ろうと思って、ジョブ・オールラウンダーとしてソロ冒険者生活を始めた僕。

しかし、冒険者として活動している中で気付いたのは、どうやら僕の能力は規格外らしいということだった。

でもよくよく考えれば当然のことなのかも。だって僕の家族はその昔最強のチームと謳われた【黄昏の夜明け】のメンバーなんだから。そして、僕は家族にみっちりしごかれて育ってきたのだから……

ともあれ、それからしばらく冒険者としていろんな依頼をこなす日々を送っていたんだけど、少しするとそれもマンネリ化してしまった。

そこで僕は双子の妹であるリツカが聖女になるための儀式——『聖女候補の巡礼旅』に挑もうとしていることを思い出した。

巡礼旅は七か所の穢れた地を浄化することで達成できるのだが、その道中は大変過酷。そのため冒険者が護衛につくことになっているのだ。

僕はすぐリツカの元を訪れ、無事彼女の護衛になった。
 それから二人でハサミシュ村を浄化し、かつて【烈火の羽ばたき】で唯一僕に良くしてくれたガイアン、そして念話で喋れるタイニードラゴン・シドラも仲間に加えつつ次なる浄化へ向かったのだった。

「よし、これでこの土地の浄化は終了だね？」

僕はリツカの方を振り返りながら言う。

ここはサーデイリアン聖王国領内の、トライヘリア港に程近い草原。

「ここが二番目に向かった不浄の地だったのだ。」

「うん、これで二つ目の光を手に入れたわ!」

リツカはペンダント型のアミュレットを掲げる。

聖女のアミュレットには、七つの宝石が取り付けられている。

これはそれぞれの土地の石を加工して作られたもので、土地を浄化すると光るようになるのだ。

うち五つは光を失っているが、二つは光り輝いている。

浄化が成功した証だ。

ちなみに、浄化されていない土地の石はその土地に来ると鈍く光り、場所を示してくれるというコンパス的な役目も果たす。

「二ヶ月で、二か所を浄化できたのは上出来な気がするよ。他の聖女候補達は転移魔法が使えないから移動に時間が掛かるだろうし」

僕がそう言うのと、ガイアンが口を開く。

「だが、リュカ。サーデイリアン聖王国には来たことがあったからよかったものの、他の大陸には行ったことないのだろう? となると俺達も船で渡る形になるのか?」

「その時は、僕が近くの大陸まで浮遊魔法で飛んで行ってから、戻ってきて転移魔法で移動……を繰り返すことになるかもね。転移魔法は行ったことのある場所に行くときにしか

使えないから、少し面倒な移動法になるだろうけど」

「私とリュカ兄いは浮遊魔法で飛べるけど、ガイアンは浮遊魔法を使えないでしょ?」

ガイアンは、そんなリツカの言葉に対して、得意げに指を左右に振って否定する。

「その点は心配いらん! 師匠直伝の気力気功術を学んでいるので、浮遊術はマスターしている。多少遅れてもついていけるぞ!」

ガイアンは体中の気を解放して、宙に浮いてみせた。

僕とリツカは拍手する。

もしかすると、これを見せたくて、移動手段に関する話を振ったのではないか、なんて思わなくもないが、これは自慢したくなるのもわかるくらい凄いことなのだ。

「凄いなガイアン、よくマスターしたね!」

「私やリュカ兄いも、浮遊術は一ヶ月ではマスターできなかったのに……」

僕とリツカが口々に褒めるが、ガイアンはどうやら納得していないようだ。

「俺は……師匠から色々学んだが、結局マスターできたのは五つだけだった。もう少し自分のものにできると思ってたんだが……!」

しかし、それでも十分凄いことだ。何故なら――

「いや、僕は三年以上費やして、マスターできたのは気力を使った技術の中でも五十七個だったし」

リッカも同意する。

「私は四十六個だった」

ガイアンの師匠であり、僕とリッカの母方の祖父——かー祖父ちゃんは、凄腕のトレジャーハンターだ。

その活躍の大きな要因の一つとして、珍しい特殊スキルを数多く習得していたことが挙げられる。

それらは体内のエネルギーを凝縮したもの——気力によって使える技術で、実用的なものからそうでないものまで幅広く、全部で百八個もあるのだ。

難易度に差があるからいくつ習得できたかはあくまで指標の一つでしかないが、それでも一ヶ月で五つは驚異のハイペースと言える。

僕は、かー祖父ちゃんの修業を振り返り、思い出に浸ろうと……浸ろうと……浸ろうと……

駄目だ、辛い思い出しかない。

横を見ると、リッカも顔を青くしていた。

僕は言う。

「今考えると、あの修業で何度か死んだことがあったな」

リッカも言う。

「そうね、私もよ……」

僕達は蘇生魔法を使えば生き返ることができる。だが、それでも死ぬ時の恐怖や痛みを感じないようになるわけではないし、慣れもしない。

だから、完全に家族の扱きはトラウマなのだ。

それに対して、ガイアンが胸を張った。

「俺は死んだことはないぞ！ 死にそうになったことは何度かあったがな！」

僕は首を横に振る。

「それはガイアンが成人して体が出来上がってから修業したからだ。僕とリッカは、成人になる前の……それどころか十歳足らずの体が出来上がっていない時期に修業させられたんだ。そりゃ肉体が耐えられないよ」

リッカもうんうんと頷いた。

「私も、リユカ兄いほどは死んでいないはずだけど、それでも魔法や気力の修業で死んだ回数は二桁に届いているわ。それに加えて、私の場合は聖女の試練で母さんからも手解きを受けていたから、それを合わせると……」

言葉を濁して俯ぐリッカ。

どうやら母さんの手解きは相当苛烈だったらしい。

僕は母さんに撲殺されまくったことを思い出していた。

聖女である母さんは僕とリツカを身籠みくもっている時に浄化を失敗してしまった。浄化できなかったその呪まじいは腹の中にいる僕達に向かい、聖力を纏まとっていたリツカは無事だったが僕は黒い魔力を纏まとって生まれたのだ。そのせいで僕は三歳になるまで命を落とし続け、その度に母さんに蘇生してもらっていた。

それ以降も命こそ落とさなくなったが、黒い魔力は時折膨ふくれ上がる。そのまま放置すれば村全体を汚染しかねない上に、死でしか魔力を発散できないから、何度も殺されて蘇生されてを繰り返してきたのである。

黒い魔力は聖女にしか見抜けないから……なんて言っていたけど、時折母さんは僕を殺すことでストレス発散していたんじゃないかと思わなくもない。

すると、ガイアンが不思議そうに尋ねてくる。

「だが、リユカが気力を使っているところは見たことがないな？ 魔法を使っているのは何度か見たが……」

僕は説明する。

「自分が気力を覚えないと他人の気力は見えないんだよ。【烈火の羽ばたき】にいた時にも何度か使っていたんだ。ザツシユとウイズとチエの馬鹿どもに、普通じゃあり得ない重量の荷物を持たされた時に、気力を使って移動していた」

リーダーのザツシユと、魔道士のウイズと治癒術士のチエ。あの三人は本当に質たちが悪

かった。

ガイアンはボンと手を打つ。

「ああ、あの二百キロくらいの荷物を背負せおわされた時か。よくついてこられると感心していたんだが、そういうことだったのか」

そこで、リツカが口を挟はさむ。

「リユカ兄いって、酷ひどいチームに入っていたんだね？」

「ああ。今思い出しても腹が立つよ。大神殿で僕に絡からんで来た男がいたろ？ そいつが

リーダーだったんだ」

僕の言葉に、リツカは苦虫にくむしを嘔かみ潰つぶしたような表情になる。

「ああ……あの時の、関わり合いになりたくないタイプの人ね」

聖女の旅の護衛志望を集めていたサーデイリアン聖王国内の大神殿で、僕はザツシユと偶然再会ぐあうしたのだ。

あの時にザツシユはしつこく僕に絡んできていたから、リツカとしてもあまりいいイメージはないらしい。

僕は呟つぶく。

「そういえば、ザツシユは今どうしているんだろう？」

リツカは半笑いで言う。

「アンティと一緒にだったよね？ あの子はブライドばかり高くて修業をよくサボっていたから、候補に選ばれた時は信じられなかったんだよね」

「そのアンティって、どんな子なの？ 主に聖女としての能力の面で」

「アンティ……アントワネットは、感知能力に優れていて穢れをいち早く察知できる能力がある。だけど浄化する能力はそれほど高くないで、穢れを発見できても浄化に手間取ると思うわ。ほら、試練の穢れ、結構浄化するの難しいし」

リッカがこうして易々と浄化できているのは、巡礼に出る前に僕と村に戻って鍛え直したからだろう。

リッカの話聞く限り、アントワネットは浄化を成功させられない可能性すらあるように思えた。

「なるほど、ザツシユはハズレを引いたのか……ごまあないな」

僕はそう言って笑い、愉快な気持ちで宿への帰路につくのだった。



一方その頃、ザツシユはフレアニール大陸のサーディリアン聖王国からトライヘリア港街に向かう間の小さな村で、二時間ほど前に浄化へと向かったアントワネットを待ちなが

ら、溜息を吐いていた。

【烈火の羽ばたき】はリュカが抜けたことで凋落し、解散を余儀なくされた。

それからザツシユはメンバーと別れ、戦闘奴隷を雇い、リュカを打倒するためのチーム

【漆黒の残響】を作る。

そしてリュカと同じく聖女候補の巡礼旅に護衛として同行しているのだが……状況は芳しいとは言えない。

「あの女、一体いつになったら浄化が終わるんだ！」

ザツシユの吐き捨てるような言葉に答えたのは、ワイルドキャッツという種類の猫獣人であるミーヤ。

「ちゃんとした環境で休んでいないから力が発揮できないと言っていたにや！」

「どきやんこすえらがあさい、せんびやうにくいなぐら！」

バグレオンという種類の狼獣人であるグレンも口を開いたが、訛りが酷くザツシユには言っている内容がわからない。

ザツシユはドワーフ族の女であるレグリーに向かって言う。

「通訳を頼む……」

「他の土地でも、あいつだけ宿に泊まらせてやったのに力を発揮できてないと言っている困ったよな……だそうです」

ザッシュは力なく首を縦に振る。

「確かに感知能力は高いのだろうが、今のところ一つも浄化できていないから、ただ移動し続けているだけだ……この穢れは今の私には浄化できないくらいに強いとかほざきやがって！ 今回の穢れも赦えないとか言い出したら、いよいよ問題だぞー！」

確かに、巡礼旅における浄化は一筋縄ではいかないと聞いたことはある。
(それにしたって、時間が掛かり過ぎるー)

ザッシュは内心で苛立ちを爆発させる。

しかし、それをどうにか呑み込み、言う。

「穢れは村の一面にあるから護衛は付けなくても良いだろう。とりあえず俺達は、金を稼ぐぞー！」

レグリーは頷く。

「そうですね、あの女のせいで金がかかりますし……そうだ、いっそのこと彼女の家に資金提供をお願いしてみたらどうでしょうか？ あれでも伯爵令嬢ですから、親に援助を取り付けるくらいできるんじゃないですか？」

「それはどうだろうな？ レグリー、聖女候補が何故平民から多く選ばれるか知っているか？」

レグリーは首を横に振った。

ザッシュは説明する。

「死んでも替えがきくからだ。聖女になれるのは候補の中でもほんの一握り。大半は巡礼旅の途中で死んじまう。令嬢は政治の道具として有用だから、親は手放したからない。何か特別な能力に秀でている者でもない限り好きに生きられないんだ。だから聖女候補が貴族から出るのは極めて稀だと言える」

レグリーは疑問を抱いた。

「でも、アントワネットさんを見ていると、そんな能力があるようには思えませんが……」
「特別な才はないが、自由に生きたい。だから聖女候補になろうとしたんだろうな」

その言葉に、レグリーは呟く。

「では、伯爵家に資金援助を頼むのは無理そうですね……」
ザッシュは大きく息を吐いてから、腰を上げる。

「まあ難しいだろう。まあそんな不確実なものを当てにするより、当座の金を稼がなければならぬってことだ。お前ら、行くぞー！」

「はいー！」

「にゃー！」

「ウダー！」

レグリーとミーヤ、グレンも腰を上げた。

こうしてザッシュ達は討伐の仕事をこなすため、村を出るのだった。



宿への帰り道を歩いていると、唐突に頭の中に声が響く。

《リユカ殿……聞こえますか？》

僕は足を止めた。

「ん？ 念話？ 誰からだ？ 確かこの声は……フローライト家の執事さんか！」

僕はボンと手を打ち、執事に返事する。

《はい、聞こえます。僕に何か御用ですか？》

《主から、ある情報をお伝えするよう言われました。リッカ様の浄化の手助けになるかもしれない、と》

《ゴルディア大陸とフレアニール大陸の浄化は終わっていますが、別の大陸の情報ですか？》

《詳しくは主からお話を聞いていただければと思います。バストウーグレスシア大陸の情報ですので、お役に立てるか？》

《わかりました、今からそちらに向かいますね》

念話が終わり、僕はリッカとガイアンの方を向く。

「これからフローライト侯爵家に向かうことになった！ バストウーグレスシア大陸の試練についての情報を教えてもらえそうなんだ。詳しい話を今から聞きに行こう」

「聖竜国グランディオンがある場所ね？」

リッカの言葉に頷く。

「うん。ひとまず侯爵家に転移するよ！」

リッカとガイアンは僕の肩に手を置いた。

僕に触れていれば、一緒に転移することができるのだ。

そして僕は転移魔法でフローライト侯爵家へと飛んだ。

第二話 侯爵様からの依頼（本来なら名譽なのでじょっけ……）

僕達は、転移魔法でゴルディア大陸内で一番栄えているカイナートの街から三キロメートルほど離れたところにある、侯爵家の玄関前に着いた。

そこで待っていたのは、執事と六人のメイドさん達だった。

「お久しぶり……というほどではないですね」

「僕がそう言うのと、執事は直角に腰を折る。そして頭を上げて言う。」

「リユカ殿にリツカ殿、それにガイアン殿もお元気そうで何よりでございます」
続いて、一番年長であろうメイドさんが口を開いた。

「私どもは、少々退屈な時を過ごしております。以前は掃除が一日で終わらなかつたくらいなのですが、今では早く終わりすぎて暇を持って余すほどです」

「修業の賜物ですね。まあ、普通の修業ではありませんでしたからね……」

そう、以前ガーライル侯爵の娘であるアリシア様をカナイ村で護衛しつつ修業させた縁で、侯爵家の皆も長期休暇を利用してカナイ村に修業しにきたのだ。その時メイドさん達は母さんから家事の手解きを受けたんだよね。

「僕は暇を閉じて、自分が母さんに稽古をつけてもらっていた時のことを思い起こす。」

「家族の修業の中では、母さんの修業が一番楽だった気がする。」

料理も掃除も回復魔法もソツなくこなせていた。

元々手先は器用な方だったのもあり、母さんから怒られた記憶はあまりない。

ただ、リツカはよく怒られていたなあ。

こいつ不器用だし、手抜き掃除をしてすぐにバレていたし。

それに、料理に関しては絶望的だったからなあ。

「本能だけで新たな料理を作り出そうとして、食材を無駄に……あ、そうだ！

僕はある提案をする。」

「暇を持って余しているのでしたら、アレンジレシピに挑戦してみるのはどうですか？」

「アレンジレシピ……ですか？」

メイドさんは首を傾げる。

「例えば砂糖は貴重なので、大量に使うのは難しい。ですから、その代わりに野菜の甘みを活かしてスイーツを作るとか……そういうったアイデアを元に、新しい料理を生み出すんです！」

「なるほど。野菜の甘みを活かしたスイーツなんて考えたこともありませんでした！ 面白いですね！ やってみたいと思います」

それから僕達は、ガーライル侯爵の執務室に案内された。

扉を開けると、書類の山と格闘しているガーライル侯爵が目に入る。

「旦那様、リユカ殿がお見えになりました」

執事が声をかけるも、ガーライル侯爵は書類から目を離さずに言う。

「すまない、リユカ君。もう少しで終わるから、そこにかけて待っていてくれ！」

僕達は、ガーライル侯爵に言われた通り長いソファに腰掛けた。

シドラは器用に僕の頭にしがみ付きながら寝ている。
 ガーライル侯爵はそれから少しして仕事を中断すると、僕らの前のソファに腰掛けた。
 テーブルには執事が淹れてくれた紅茶と、茶請けのクッキーが出される。

シドラはその匂いで目を覚まし、テーブルの上に移動すると、クッキーをつまみ始めた。
 そんなタイミングでガーライル侯爵が口を開く。

「すまない、修業が長引いてしまつてね。結局帰るのが予定より一週間も遅くなつてしまつたんだ。そのせいで仕事が溜まつていてね。片端から片付けてはいるのだが、一向に終わりが見えない……というわけさ」

「天鏡転写を用いた最終試験をクリアできただけで御の字だと思えますよ。むしろ、なんかすみません。うちの祖父の無茶ぶりに付き合わせてしまつたみたいで」

メイドさん達は母さんに師事していたけど、ガーライル侯爵と執事さん達は父方の祖父——と祖父ちゃんのもとは修業に励んでいたので。

一ヶ月の滞在予定だったのだが、修業が長引いたのと、最終試験で苦戦したせいで予定より一週間余計にかかつてしまった、というわけだ。

その最終試験というのが、天鏡転写によつて生み出した自分を倒すというもの。

天鏡転写とは、映った人間と同じ能力を持った分身を生み出し、指定した相手を襲わせる鏡の魔道具。その分身は元の人間と同じ性能を持つため、倒すのは困難を極める。

ガーライル侯爵は首を横に振つた。

「いやいや、貴重な体験をさせてもらつたよ。謝罪は不要だ！」

「それなら良かったです」

するとガーライル侯爵が手をパンと打つて、話を変える。

「つもる話はまた後日にするということで、早速本題に入ろう。私の知人が運営する、バストゥーグレシア大陸の東方にある魔法学園内で最近、妙な事件が起こっているという話を聞いたんだ」

「妙な事件……ですか？」

僕が聞き返すと、ガーライル侯爵は頷く。

「数名の生徒が突如として魔力枯渇——MP枯渇を起こして寝たきりになっているとか、生徒が召喚した従魔が突然暴れ出すとか……そういった事件が後を絶たないんだ。生徒達に聞いても曖昧な情報しか得られず、原因の究明が難しくてね。そこで、知り合いに優秀な冒険者がいたら紹介してくれないかと持ちかけられたというわけさ」

僕は納得する。

確かに不浄の地の近くではそういった不可思議な現象が起こると聞く。それでこの話を持ちかけてきたのだろう。

その隣で、リツカが手を挙げた。

「魔法学園といえば、十五歳から十九歳の子達が通う場所ですよ。私とリュカ兄いは生徒として潜入できるとしても、ガイアンはどうするんですか？」

「確かにガイアンは年齢的にアウトだし……」

僕が視線をガイアンに向けると、ガーライル侯爵は言う。

「ガイアン君には講師として潜入してもらおうと考えている」

「俺が講師……ですか？」

ガイアンは目を見開いて驚いた。

ガーライル侯爵は淡々と続ける。

「そうだ、気功術の講師として潜入してもらえないだろうか」

ガイアンは、見た目こそ脳筋だが、意外にも常識人で、教えるのも上手い。

【烈火の羽ばたき】時代には、彼の助言に救われたこともしばしばあった。

そう考えると適任かもしれないな。

リュカも同じ結論に至ったのだろう。頷いている。

そんな僕らの様子を見て、ガイアンは「わかった」と小さな声で言った。

しかし、僕らは他に気にしなくてはならない大きな問題を抱えている。

「学園の生徒として生活するならば、あまり僕達の実力を見せない方が良いでしょう」

「リュカ君は無詠唱で魔法を発動していたな。無詠唱で魔法を発動できる人間は極めて稀

だから、まず詠唱はするようにしてほしい。その上で、かなり力を抑えないと怪しまれてしまうだろう」

ガーライル侯爵の答えに、僕は思わず唸る。

「むう……僕詠唱は苦手なんだよね。村ではずっと無詠唱で魔法を発動していたから、なんだか違和感があるんだよねあ」

リュカもそれに同意する。

「私も詠唱は苦手かも……それに、変装もしないといけないかもね」

「名前はどうしましょう？ やはり偽名を使った方が良いでしょうか？」

「潜入と言えば変装と偽名」なんて少しワクワクした気持ちで質問したが、それはガーライル侯爵にあっさり却下される。

「変装も偽名もいらない。この大陸ならいざ知らず、学園のあるバストゥーグレシア大陸で君達を知っている者はまずいないだろうし……」

「そっか、それなら確かに目立たないな……なんて考えていたのだが、ふと机の上でクッキーを齧り続けている存在が目に入る。」

「あ、シドラはどうしよう？ 学園では紋章の中に入っただけでもらうしかないのかな？」
僕の手の甲には紋章があり、シドラをそこに収納できるようになっている。

すると、それを聞いたガーライル侯爵が言う。



「シドラとは、そのテーブルにいる子竜かい？ リユカ君の従魔だよな？ 魔法学園では、従魔との連携れんけいなどを学ぶクラスもあるから、怪しまれることはないと思うぞ」

「なるほど！ それなら安心ですね！」

僕は言いながらシドラの頭を撫なでる。

シドラはキョトンとした顔をしていた。

それにしても、先ほどからガイアンが何やら難しい顔をしている。

どうしたんだろう……と思っていると、急に顔を上げた。

「魔法学園と聞いて、何か聞き覚えがあると思いきほどこから思い出そうとしていたんだが、やっと思い出せた。【烈火の羽ばたき】が解散した時、ウイズとチエが魔法学園に戻ると言っていた」

僕は思いがけない名前に、思わず顔をしか顰める。

「ウイズとチエが魔法学園に!? 講師でもやっているのかな？」

「それはわからないが、ウイズとチエは魔法学園の卒業生なんだ。イチから魔法の研究をす
ると言っていたから、研究員として雇われた可能性もある」

「担任とかじゃなければ別に良いや。教育機関の研究員なんて、こちらから訪ねない限り
会うことはないだろうし」

そんな風にガイアンと話していると、リックが口を挟む。

「ウイズとチエって、誰？」

「僕とガイアンが昔いたチームの魔道士で……態度がデカくて、やたら偉そうなおばさん」

「おばさんって！ ウイズは俺と同じ年だぞ！」

ガイアンが立ち上がってそう言うので面白くなって、僕は思わずニヤツとしながら言葉を重ねてしまう。

「なんですか、おじさん？」

「俺はまだおじさんと呼ばれる年齢ではない!!」

確かガイアンの年齢は二十五、六とかだった気がする。

ウイズにしたってどちらかと言えば大人のお姉さんといった風貌ではあったが、いかんせんこちらには恨みがあがる。多少の悪口は許してほしい。

ひとまずガイアンには「ごめんごめん」と謝りつつ、ガーライル侯爵に向き直る。

「ガーライル侯爵、学園に潜入するのは何日後ですか？」

「早ければ早いほど良いが……逆にいつであれば問題ない？」

「バストウーグレシア大陸には行ったことがないので、転移魔法が使えないですよね。

サーデイリアン聖王国領内のトライヘリア港からサーテイルの港街まで、船で行くなら最低で二週間はかかりますし」

僕の言葉に対し、ガイアンが言う。

「さつきは、大陸まで飛んで行くとか言っていなかったか？」

「近ければそれでいいんだけど、バストウーグレシア大陸から見て東に位置するここ、ゴルディシア大陸から行くこうにも大陸の西側には行ったことがない。バストウーグレシア大陸の西方に位置するフレアニール大陸から行くにしても学園が大陸の東寄りにあることを考えると大変だ。飛ぶのには集中力と体力を要するから、休息も必要だしね。別の世界にある地球という星から勇者として転生してきて魔王を倒した英雄、ダン・スーガーが作ったと言われる魔道四輪シルフィンダーでもあれば多少は違うんだろうけど」

「物語に出て来る、馬を使わない乗り物か。確か魔王との戦いで破壊されたんだよね？」

ガーライル侯爵はどうやらシルフィンダーを知っているらしい。

「そうなんですよ。英雄ダンのことだから、他にも作っているんじゃないかと思ったのですが……」

「ないものねだりをしては仕方がない。バストウーグレシア大陸まで、どうやって早く行くかを考えよう。私も協力は惜しまない」

それから四人で話し合っではみたものの、これといったアイデアは出なかった。ひとまず休憩を挟もうということになり、クッキーを一齧りした瞬間に、僕はあることを思い出す。

「そういえば、バストウーグレシア大陸の近くにある無人島にこの間行ったんだ！ 確か、モイレル港があった場所で……近くにクフツサ漁港街があったはず。なんで忘れてたんだろ」

しかし、ガーライル侯爵は洪面を作る。

「モイレル港……確か、魔王の侵攻で滅ぼされた島だったか？ 確かにその場所のすぐ近くにバストウーグレシア大陸があるが、クフツサから魔法学園までは、それなりに距離があるぞ！」

「大陸内での移動はなんとかなります！」

「リュカ君がそう言うなら……では、こちらを受け取ってくれ！」

僕はガーライル侯爵から依頼書と、学園長宛の手紙を受け取った。

僕は侯爵家を後にして、モイレル港に転移魔法で飛んだ。

既に空が赤く染まっていたので、その日はそこで野宿をしてから翌朝にクフツサ漁港を目指して浮遊魔法で移動することにしたのだった。

第三話 リュカの禁句！（立ち寄った港で……）

「君のためなら死ぬる！」

「え？ あの……」

一人の見窄らしい青年が跪きながらリュカに手を差し伸べ、愛を伝えていた。

当然のごとくリュカは戸惑っている。

何故こんなことになったのか——話は二時間前に遡る。

僕達三人は、モイレル港の近くの誰も使っていない小屋で朝を迎えた。

「さて、そろそろ出発しようか！」

僕の言葉に、リュカ、ガイアン、シドラが返事する。

「うん！」

「おう！」

「わかったヨ！」

それから僕とリュカは浮遊魔法で、ガイアンは気力気功術の一種である浮遊術で、シド

立ち読みサンプル はここまで

ラは自分の翼でバストウーグレシア大陸を目指して飛び始めた。海の上を飛びながら大陸に向かう途中に、海草の群生地があったのでいくらか収穫し、更にクジラに似た生物も捕まえ、収納魔法に入れた。

シドラはそれを見て食べたそうにしていたが、我慢してもらおう。

小一時間ほど飛んでいるとクフツサ漁港街が遠目に見えたので、人目につかないよう港から離れた場所に降りて、そこへ向かった。

クフツサ漁港街は元は寂れた漁村だったのだが、英雄ダンのパーティメンバーであるクリアベールの故郷だということで街にまで発展した。

だが、それも一時のことで現在は活気があるとは言いがたい。

「ここがグランマの故郷なのね」

「グランマは故郷に戻っているという話だったけど、いるかな？」

僕とリツカが話していると、ガイアンが聞いてくる。

「一体、誰の話をしているんだ？」

僕はその質問に質問で返す。

「ガイアンは、カナイ村を誰が作ったかは知っている？」

「知らん！」

「英雄ダンが魔王を倒した後に妻のクリアベールと孤児達とで作った村なんだよね」

「え？ そうだったのか!？」

「そう。だから村民は英雄ダンをグランパ、クリアベールをグランマと呼んでいるんだ」

「ちよ……ちよつと待て！ グランマが故郷に戻っているって、つまりクリアベール様はまだご健在なのか!？」

「グランマは半神だから、人間より寿命が長いんだよ。だから、グランマどころかその母親だってまだ生きているはずだよ」

「じゃあ、お前らはもしかして英雄ダンの子孫なのか!？」

ガイアンが前のめりで聞いてくるので、僕はにやりと笑って人差し指を立てた。

「うん、そうだよ！ ……とりたいところだけど、さすがに違う！ 英雄ダンには子供がでなかつたらしい」

僕の言葉を、リツカが継ぐ。

「人間と半神の間には、子供がでにくいんだって」

そんなことを話しながら歩いているうちに、僕らは街の入り口に到着した。

そこでは、なんと一人の青年が、複数の男性に囲まれて殴られているではないか。

「どうする？ 助けに入るか？」

ガイアンが聞いてくるが、僕は首を横に振る。

「いや、関わり合いになったら面倒だから慎重に……ってリツカ!？」